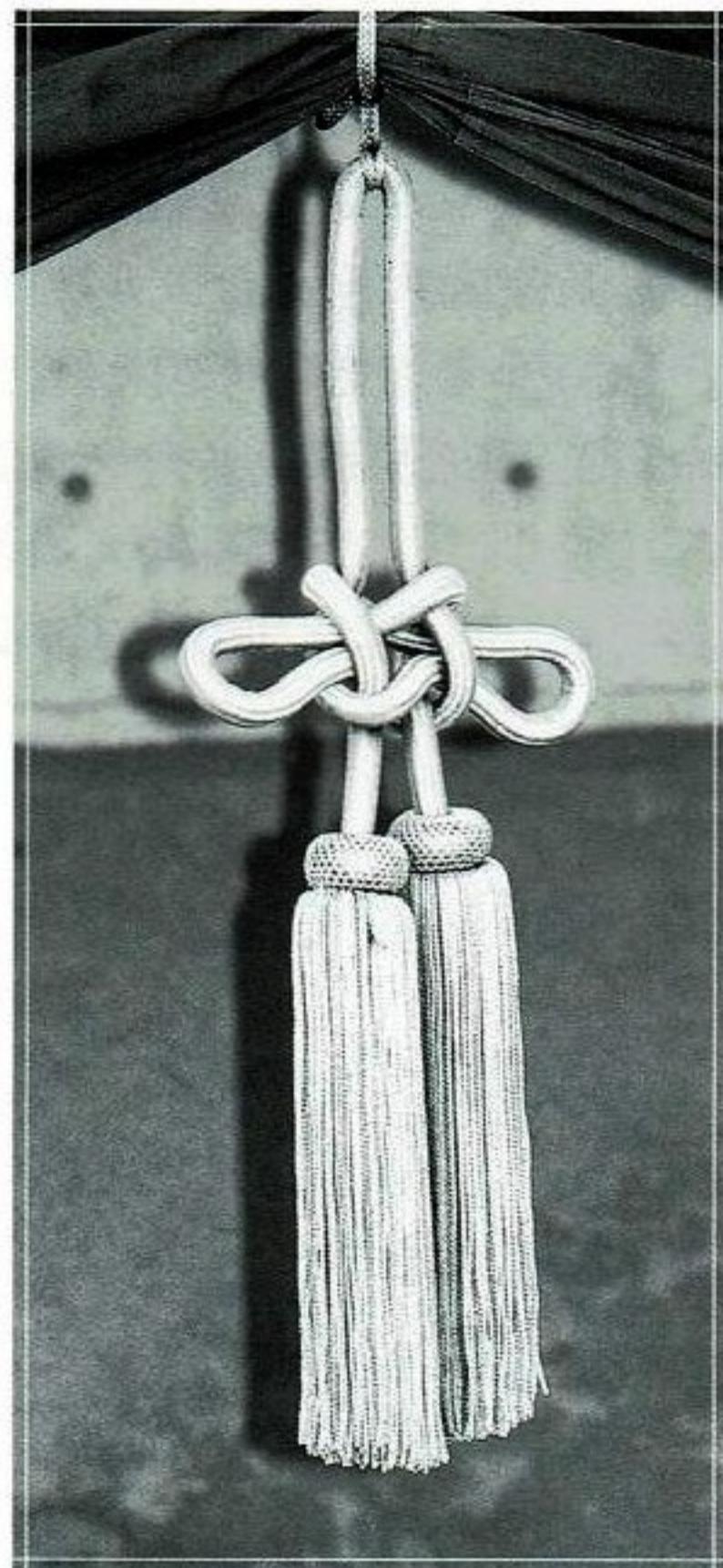


山梨県弓道連盟の歩み



山弓連結成以前

山梨の弓のルーツを辿っていくと、逸見流、武田流、小笠原流や、浅利与一の時代にまでさかのぼって考察することも必要かも知れない。それらは皆それぞれに甲斐の国と大きな縁やつながりを持った存在だからである。また、日置流各流派の宗家を名乗る家系が、山梨にはあちこちに在ることも甚だ興味深いことである。それらのことが山梨の弓の歴史にどう関わってきたのかについて考察して見ることも十分に意味のあることではないかと思われる。しかし、残念ながら現在のところ余りにも資料不足といわざるを得ないので、それは別の立場からの研究に委ねることとする。

時代がくだって太平洋戦争以前には、武徳会山梨県支部のもと、県内各地に道場や弓道会、そして諸流派の流れをくむグループがあり、多くの弓道人が活躍していた。

たとえば、秋山幹光、吉野水月、吉田英三郎、斎藤一的、井柳健吉、中谷政時、古屋敏幸、古屋むめ、石津安太郎、座光寺貞良、横谷正勉、三沢元定、金井徳重などの弓士の名が挙げられる。しかし、これ等先人の活躍や現在の礎となった系譜については、これまた資料不足ゆえに、本誌では、戦後の組織再建以降の歩みのみを記述することとする。

再建結成以後の年代別特徴

昭和20年代 組織再建復活の時代

昭和30年代 全国レベルの競技力復活をめざしての努力の時代

昭和40年代 組織拡大整備の時代

昭和50年代 かいじ国体に向けての大躍進の時代

昭和60年代～平成年代 かいじ国体の成功とその体験によって培い、貯え、発揮された力を、更に発展、定着させて行く為に努力している時代

以下、この年代区分にしたがって、50年間の概要を記す。

なお、記述の仕方は、できるだけ原資料に忠実に事実を羅列することを基本としたが、それだけでは乾いた感じの雰囲気になるので、その時々のエピソードや若干の解説をも加え、所謂「読み物風」仕立てとした。

組織再建復活の時代—昭和20年代—

戦前・戦中の、いわゆる武徳会時代に於ける本県弓道界は、まことに目覚ましい活躍振りを示し、全国的にみても活力溢れる組織と、すぐれた競技力をもって他府県よりも一歩抜きん出た存在であった。

しかし、昭和20年の敗戦を境に、事情が一変した。同年11月に武道禁止令が占領軍から出されて、弓は日本中から姿を消してしまった。それまで、ひたすら修練に励んできた多くの弓道人は、呆然自失、為すところを知らなかった。殊に、真剣に道を求めてきた人ほどその落胆は大きく、中には、失意の余り弓具を廃棄してしまった人さえいたという。

更に追い討ちをかけるように、昭和21年11月武徳会解散ということが続き、武道復活は正に絶望的と思われた。ただ、この後出された「弓をスポーツとしてなら行ってもよい」という占領軍命令が、かすかな救いであった。本県では、このわずかな望みの光に、いち早く反応した。全国的にみても最も早い動きであった。何人かの有志が、誰いうとなく弓道連盟設立に向けての相談を始めた。

その第1回会合を山梨市の飯島茂治氏宅で開いたのを皮切りに、その後、数次にわたって、飯島氏宅あるいは山梨社に会合して協議を重ねた結果、ようやく昭和22年4月1日に「山梨弓道連盟」という名の組織を立ち上げた。

昭和22年4月1日 山梨弓道連盟設立

会長 吉田英三郎、専務理事 角田武文。現在の「山梨県弓道連盟」は、昭和24年の全日本弓道連盟へ加盟する際に改称変更したものである。連盟結成早々の5月には「途方もない快挙」をやってのけた。それは、檜原神宮全国弓道大会での団体優勝である。この頃は、戦後まだ日も浅く、食料事情、交通事情もひどく悪い時代だったが、連盟結成で意気は盛り上がり、旅費その他一切自弁で5人の選手は参加した。風間正寿、高山孝太郎、角田武文、石津安太郎、井柳建吉と、いずれも一騎当千の強者揃い。全国の強豪と競り合って大健闘したことは記憶されているが、経過記録は惜しくも行方知れずで、詳細不明。

しかし、ここに笑えない笑い話が語りぐさとして残っている。

近的の試合は入賞を逸したが、気を取り直して遠的に臨む。その頃から天気が崩れて吹き降り激しく各チームとも苦戦を強いられた。山梨チームは健闘し、大後の高山の3本目で東京都チームと同点。最後の矢の出来如何が優勝を決めるということになった。みんなの期待と注目の集まる中、高山から離れた矢は的から左にそれで飛んで行ったが、何と的寸前で右に急カーブ、そして的的に命中してしまった。この瞬間、優勝決定！！

これを退場しながら目にした前立ちの井柳が思わず大声で「ありがとう」と叫んでしまった。しかし、それでも流石に緊張の頂点にあったせいか誰一人咎める者も笑う者もいなかつたという。なお、この大会の個人戦では、近的で風間が第2位、遠的で角田が第6位に入賞し、「山梨強し」を全国に印象づけた。まことに幸先良い出だしであった。

昭和 23 年

1月の役員会で、名誉会長として山梨社社長 金井武氏を推戴。更に強力な布陣となった。檜原大会優勝を契機に忽ち会員も増加したが、その大部分は峡東地区を中心であった。

5月、第2回檜原神宮全国弓道大会で、またまた栄冠を獲得。選手は金井徳重、牧野浅次郎、丸山宇太郎、石津安太郎、高山孝太郎の5名。近的団体で準優勝。個人遠的で石津が優勝。依然として、「山梨強し」の名を馳せらす。

昭和 24 年

全日本弓道連盟発足。それに伴って山梨県も加盟。以降、「山梨県弓道連盟」と称す。

ところでこの時、山弓連の発足とは直接的には関わりのあることではないが、しかし、山梨の弓道にとって、その歴史の中に特筆すべきことがあった。全日本弓道連盟発足時の初代会長は、実は山梨県出身の樋口実氏だったのである。

氏は、増穂町高下（ご存じ、元旦にダイヤモンド富士が見える観光名所）の生まれ。東京大学卒業後、経済界で活躍し、戦後は東京首都高速交通営団社長として、東京復興に手腕を發揮していたが、全日本弓道連盟発足に際して初代会長に選ばれ、更に第5代（昭和44年～48年）にも再任され、弓道連盟発展に大きな貢献をなさった人である。かいじ国体の弓道競技会場が増穂町と決定するわずか2年前に、惜しくも逝去されて、栄えあるその日を見ることは出来なかったが、それまでご健在であられたらと、惜しむ声も強く、かいじ国体開会式を前に、当時の齋藤会長をはじめ全日本弓道連盟の大幹部のお歴々が打ち揃って、標高600メートルにある樋口家の墓地を訪れ、懐旧談を交わすと共に、かいじ国体の成功を念じて來たというエピソードもある。

全日本弓道連盟の発足にあたっては、山梨は、その初代会長樋口実氏の存在を通して、深い関わりを持っていたわけである。

昭和 25 年

第5回国民体育大会で第3位入賞を果たす。監督 金井徳重、選手 石津安太郎、丸山宇太郎、角田武文の3名。

昭和 26 年

連盟発足以来、専務理事として多大な功績を残してきた角田武文氏が辞任。後任に新谷新助氏が就任。

7月、文部省通達により学校弓道が許可されることになった。直ちにその対策が開始される。

昭和 27 年

7月、県教育委員会との共催により、学校弓道指導者講習会を開催。その成果があって、この年のうちに、山梨高校、韮崎高校、農林高校、日川高校にそれぞれ弓道部が設けられた。この対応の早さが、以後、高校弓道部の活躍につながった。

昭和 28 年

吉田英三郎会長が辞任し、新会長に金井徳重氏が就任。更に副会長制を敷くことにし、渡辺勝、石津安太郎、丸山英治、井柳健吉、中込銀平、内田高甫の6氏が就任して万全の指導体制をつくった。

9月には、本連盟主催で関東大会を開催した。焼け残った舞鶴城内弓道場は、関東地域では貴重な存在であった。

10月18日、山梨県立農林高等学校創立50周年記念道場開き招待試合が行われ、山梨高校、日川高校、韮崎高校が参加した。これが戦後初の高校弓道試合であった。

昭和 29 年

1月、名誉会長金井 武氏が辞任。新たに室井醇一郎氏を推戴。

6月、高体連事務局に高校弓道関係者が会合し、山梨県高等学校弓道連盟（仮称）を発足させ、更に第1回高校弓道大会開催と高体連に弓道専門部を設けるよう運動することを決定した。

7月、初の県下高校弓道大会を開催。日川高校、山梨高校、農林高校、韮崎高校、甲府第一高校、石和高校、他1校不詳の7校39名が参加した。

10月16日、長野、静岡、山梨、三県連合審査会を舞鶴公園弓道場で開催。それに前後して、戦前の武徳会段位の認定、移行等も行われた。

10月30日、専務理事在職中、不幸にも病に倒れた新谷氏の後を継いで、千野保平氏が新たに専務理事に就任。

11月29日、東日本弓道大会が國學院大学で開催された。農林高校が男子団体（雨宮克美、塩沢長徳、花形直徳）で3位入賞。 山梨高校が女子団体（水上洋子、里吉真弓、他1名氏名不詳）で優勝を果たした。

全国レベルの競技力めざしての時代—昭和30年代

昭和 30 年

1月、高体連に弓道専門部設置が決定し、部長に平島雅郷氏（韮崎高校）、副部長に三枝正徳氏（農林高校）を選出。高校弓道の組織的活動態勢が整った。

昭和 31 年

1月、山弓連副会長として堀内嘉吉氏（富士吉田地区代表）を選出。

8月、第1回全国高校弓道大会が中央大学弓道場で開催。農林高校、韮崎高校、山梨高校、甲府商業高校が参加。

11月23日、関東高校弓道選手権大会が行われ、農林高校が男子団体（塩沢長徳、石川光造、手塚良夫）で2位入賞。

昭和 32 年

山梨県勢が大活躍の一年。

1月、帳簿の整理等、組織化に功績のあった千野保平氏が専務理事を辞任し、後任に曾根利重氏が就任。千野氏は副会長に。

4月、金井会長が辞任し、新会長に井柳健吉氏が就任。

5月、京都三十三間堂遠的大会に金井徳重、曾根利重、白須角助の3氏が参加。

金井、曾根の両選手は予選で惜しくも敗退。

白須選手は数次の予選を通過、決勝でも大健闘し、遂に日本一の栄冠を獲得して、優勝者名を刻した大額を三十三間堂に高々と掲げることになった。

6月、高体連弓道専門部長に、三枝正徳（農林高校）、副部長に古屋薰（甲府商業）の両氏が就任。

10月、静岡（三島）国体で、一般男子近的優勝、高校男子近的優勝と遠的準優勝という大金星。一般男子は監督井柳健吉、選手は石川光造、小野朝雄、風間正寿。高校男子は、監督三枝正徳、選手は三木達雄、金丸修、金丸誠司（いずれも農林高校）等が出場。

一般男子宿舎は東京都チームと一緒に。予選で東京は一位通過。決勝も優勝間違いなしと自信に溢れ、前夜には宴会を催すほどの余裕。それに反してわが山梨チームは予選通過では最下位。しかし、あの奢れる東京に必ず勝ってみせると、密かに心に期するものがあり、準備万端を整え、ゆっくり熟睡し、休養を取って決戦に備えた。翌朝、出発にあたって石川選手は「今日は俺は必ず皆中してみせる」と決意表明。みんなも「ヨシッ！」と応えて試合に臨んだ。

試合開始。石川選手は予言どおり見事皆中してチーム快進撃の先頭を走り、また、風間選手はこの一本で勝負が決まるという矢は決して逸しなかった。その時のこと、「中るまで放さなかった」と言っていたが、けだし、名言である。小野選手も、また快調に的中を続け、遂に団体優勝を成し遂げたのであった。

試合後の話で、井柳監督は、三島到着以来、毎朝欠かさず選手には内密に、三島大社に願掛けをしていたという。みんな感激して帰途全員で御札の参拝をした。

高校男子も優勝と準優勝獲得という驚異的記録であり、山梨農林高校の名を天下に知らしめた。

11月には、舞鶴公園内弓道場で開催された関東高校弓道大会で、またまた、男子団体で農林高校（三木達雄、小山一昭、金丸誠司）が優勝。女子団体では甲府二高（古屋文子、志村満喜江、功刀晴子）が3位入賞。女子個人で鶴田芳恵（農林高校）が3位入賞して氣を吐いた。



農林高校の活躍を報じる当時の山梨日日新聞

昭和33年

前年に引き続き山梨の弓勢は止まらない。

6月、第2回関東高校弓道大会で金丸 修（農林）が男子個人優勝。

8月、第3回全国高校弓道大会で金丸 修（農林）が男子個人4位入賞。

10月、富山国体では一般男子遠的3位入賞。監督井柳健吉、選手、座光寺貞良、古屋俊彦、白須角助。特に古屋選手の的中は冴え、四ツ矢32点という驚異的大記録（歴代タイ記録）を達成して「遠的の神様」「今与一」の異名を取った程であった。

昭和34年

6月、関東高校弓道大会。加藤 智（農林高校）が男子個人第3位入賞。中島孝子（農林）が女子個人優勝を果たす。

8月、全国高校弓道大会、農林高校（花輪栄一、沢登孝暁、林 嘉彦）が男子団体3位入賞。花輪栄一が個人技能賞に輝く。

11月、関東高校選手権大会、女子団体優勝農林高校（中島孝子、沢登紀子、荻野ともえ）女子個人戦でも沢登紀子が3位。

10月の東京国体では、一般男子が踏ん張り、近的で3位入賞。監督井柳健吉、選手 座光寺貞良、風間正寿、古屋俊彦。この時、風間選手は国体選手中で最年長の70歳。座光寺58歳、古屋26歳と老練、新進のチームワークよろしく、見事連続入賞を果たした。

昭和 35 年

この年も山梨勢の快進撃は続く。

6月、関東高校弓道大会、女子団体優勝 甲府二高（石田由美子、三神良子、保坂美智子）準優勝 農林高（土屋浜子、飯野比出子、佐藤すみ子）とダブル入賞。

8月、全国高校総体（インターハイ）で、男子団体準優勝 萩崎高（漆原嘉仁、土橋久貴、柳本保佑）頂点まで今一歩のところ。

10月、第15回熊本国体、高校男子遠的四位入賞 萩崎高（漆原嘉仁、土橋久貴、駒井幸民）

11月、関東高校選手権大会、男子団体優勝 萩崎高（上坂顕、土橋久貴、駒井幸民）。

これまで男子は農林高のひとり舞台だった弓界に、萩崎高がからんで来て、いよいよ層の厚さが加わった年であった。

昭和 36 年

高校の入賞記録は途切れることなく、この年も続く。

8月、全国高校弓道大会で男子個人技能賞を小林源治（農林高）が獲得。的中の基礎は正射にあり。「正射必中の山梨」をみごと証明した受賞であった。

10月、第16回秋田国体。高校男子近的6位 萩崎高（上坂顕、駒井幸民、土橋久貴）。この時の監督評は「必ずしも絶好調とは言えなかったが、際どい場面を何度も粘り強く勝ち抜いて得た入賞。精神力の強さでは最強のチーム」

昭和 37 年

6月、関東高校大会。男子団体3位入賞萩崎高（上坂顕、立花崇彦、駒井幸民）
男子個人優勝 上坂顕（萩崎高）、3位小林源治（農林高）、女子個人技能賞、日原京（山梨高）と入賞ラッシュ。

8月全国高校大会、女子団体3位 山梨高(日原京、鎮目不二子、雨宮幸子)更に同チームが団体技能賞をも獲得する大健闘。

10月、第17回岡山国体。高校男子遠的3位入賞農林高(小林源治、島田実、飯野富士夫)

昭和38年

6月、関東高校大会。男子個人3位山下 守（農林高）女子団体3位 農林高（功刀博子、鶴田はるみ、深沢和子）女子個人優勝 江上良子（農林高）3位鶴田はるみ（農林高）

昭和39年

30年代掉尾を飾る大金星は、第19回新潟国体における高校女子近的遠的2種目優勝の完全制覇を成し遂げた韮崎高の快挙であった。

国体に高校女子種目が取り入れられて3年目。長年にわたって貯えてきた力をここで一挙に爆発させて近的優勝を勝ち取るや、その勢いで遠的をも制して二つの栄冠を獲得した。監督 雨宮康雄、選手は加賀美恵子、藤原ほづみ、飯室佳世子であった。この韮崎高弓道部を長年にわたって育て上げてきた平島雅郷氏の蔭の力も又、忘れられない功績である。

20年代から30年代前半にかけて活躍を続けてきた一般の部は、その後台頭してきた他府県の新しい力に阻まれて、30年代後半から、やや低迷。しばらく雌伏の時代を迎えることになる。

組織拡大・充実整備の時代—昭和40年代—

戦前・戦中時代からの遺産に頼るだけでは、その力をいつまでも保ち続けていくのは困難である。新しい力をやってゆく必要に迫られていた。一方、新しい力を育てていた高校弓界は、当然の如く全国レベルの力を守り続けていた。「組織整備と指導力の強化」今後の展望を切り開く教訓となるはずであった。

昭和40年

10月、岐阜国体で、高校男子団体3位入賞 農林高（佐久間竜二、深沢 勇、今井郁夫）監督は同校弓道部創立以来の三枝正徳氏であった。

昭和41年

6月、関東高校大会。男子団体3位入賞農林高（保坂重雄、深沢 勇、古屋 孝）女子団体3位入賞 韮崎高（内藤ともえ、雨宮清香、五味二三恵）。男子個人3位保坂重雄（農林高）、女子個人優勝 内藤ともえ（韮崎高）。

10月、第21回大分国体。高校男子遠的6位入賞 農林高（保坂重雄、深沢 勇、古屋 孝）

昭和 42 年

長い間続いていた高校の全国大会、関東大会での入賞記録が初めてゼロになった年。一般の部もこのところ稍、不振が続いて、意気も上がらず、その対策に苦慮の日々。

昭和 43 年

山弓連創立以来の功績者であり、また、二度にわたって前後通算九年余り会長の職にあった金井徳重氏が逝去。年度途中から、座光寺貞良氏が代わって会長に就任。

この頃までは、会員が特定地域に片寄っていて、登録会員空白地域がかなりあった。それは、発足以来の連盟の性格が、昔からの弓仲間や同志が集まっての、同好会的運営を続けていて、組織拡大等の運動にまで手がまわらなかった為もあった。実際には、登録会員以外にも、戦前からの弓道人や、高校弓道部出身の若者達が、県下各地に多数いたにもかかわらず、それぞれ、地元に弓道場もなく、連盟からの呼びかけもないまま、表に出てこない状況が続いていた。

特に、既に高校弓道は復活していて、良い指導者に恵まれていたこと也有って、全国大会で、かなりの活躍をしていたことを考えると、これらの層の組織化を急がねばならなかつた。そういう論議も度々出されていたが、その具体策となると、なかなか妙案は浮かんでこなかつた。

8月、全国高校弓道大会で、男子日川高、女子菲崎高が揃ってベスト8入りしたが、上位入賞ならず。

関東教職員大会で、日原正史が個人2位入賞。

昭和 44 年

この頃から、各郡市体育祭に弓道競技が取り入れられる所が増えてきた。特に郡部では、各町村対抗の得点争いということになるため、各町村体協が競って弓道選手の発掘に努めた。また、それに伴って体協弓道部設置や町村営弓道場の建設も盛んになった。これが一つのキッカケになり、それまで休んでいた古い弓士達が弓界に復帰を始め、あるいは、関心を持ちながら躊躇していた人達が弓を始めるようになり、弓引きは急速に増加し始め、地域的な片寄りも次第に少なくなつていったのである。

6月、農林高に立射10人立の弓道場が新設され、ここで関東高校弓道大会が開催された。

8月、全国高校弓道大会。男子団体3位入賞 菲崎高（篠原俊夫、功刀敏明、菊島快至）

また、市川高の久保欣次が個人皆中賞を獲得して氣を吐く。

昭和 45 年

組織拡大に伴う執行体制強化を図り、副会長を増員。会長 座光寺貞良、副会長 曽根利重、角田武文、中谷政時、渡辺良雄、理事長 曽根利重（兼任）

選手の活躍も続いた。

8月、全国高校弓道大会 男子個人5位 池田広和（市川高校）

10月、第25回岩手国体少年男子遠的6位入賞（選手名一部不詳）

昭和 46 年

役員改選。座光寺会長留任。副会長は曾根利重、小俣繁、角田友義、渡辺良雄となり、曾根理事長も留任。

昭和 47 年

会員数は300名を超える、次第に組織は拡大してきたが、その中身は郡市支部あり、町村支部あり、大学や職域支部も混ざっていて、その上、会員間の意識のズレもあるなど、組織的な動きは、なかなか思うように運ばなかった。会議の度に指導力の強化、特に事務局の整備と事務処理の迅速化、見通しをもった企画力の強化を望む声が出されたが、それらの歩みは遅々として進まなかった。もともと、こういう組織は、それぞれが自分の仕事（職業）を持っているボランティア役員が運営せざるを得ない宿命を持つ上に、一人ひとり抛って立つ生活体験（人生体験）が千差万別、しかも年齢差や戦前戦後の意識の差などもあって、議論がかみ合わず、役員の苦労は並大抵のものではなかったと想像できる。

しかし、このような中から、次第に組織の整備や役員の在り方などが問いかれて、次の時代に移行していくように思う。

8月、全国高校弓道大会。男子団体3位入賞。農林高校（柳本武彦、河西順彦、斎藤達也、飯野貴美雄、清水久）

昭和 48 年

国体で勝つことが組織強化のひとつの要素という観点から、選手選考方法を改める。まず、国中、郡内、岐南の3地域に分けて第1次予選会を行い、更に、その通過者を集めて総合予選会を数回開催して逐次絞り込む方式とした。1次予選会への参加者は各地域とも

20~30名に達し極めて盛況。組織拡大の成果はこんなところにも現れた。

しかし、肝心の国体での成果は、それほど急には現れず、入賞なし。今一歩というところに止まった。

この年、副会長を2人制に戻し、その内ひとりは、高校の組織化を重視する為、高校教員を充てることとする。会長 座光寺貞良、副会長 小俣繁、平島雅郷、理事長 曽根利重。

昭和49年

8月、全国高校弓道大会。男子個人5位入賞、高野道雄（峠南高校）。

入賞者の範囲（出身高校）も次第に広がりを見せってきた。

かいじ国体に向けての躍進の時代—昭和50年代—

昭和50年

役員改選。7年間会長を務めた座光寺貞良が辞任して新たに千野保平が就任。

副会長は丸山宇太郎、小俣繁、遠藤侃一、理事長 田草川元造の陣容で新発足。

しかし、年度途中で事情により、千野会長が辞任した為、その後任に座光寺貞良が再び就任。

この年、地域支部24（郡市支部と町村支部が混在）。大学支部3、計27支部。会員数は一般と大学生と会わせて438名。

昭和51年

関東地域の国体未開催県が3県、その内、栃木（55年）、群馬（58年）に続いて山梨は61年の開催が内定との情報が入る。今後10年の間に国体開催県にふさわしい諸条件を早急に整える必要に迫られる。即ち、

- 1 会員の増加（競技運営役員確保）
- 2 称号者の増加（審判員や指導者の確保）
- 3 選手強化、競技力向上（国体での勝利）
- 4 講習会、競技会の充実（競技運営力の向上）
- 5 財政の確立、充実などであった。

会議の話題は、いつものことばかり。しかし、何から手をつけ始めたらいいのかわからず、話はこの段階でいつも空転。まだまだ先のことという意識が強かった。

昭和52年

役員改選。会長 座光寺貞良、副会長 宮田嘉寿、小俣繁、熊沢淳吉、理事長 田草川元造。国体準備をめざしての組織整備を行い、総務、競技、指導、の3専門部を設けて業務執行態勢の強化充実を図る。

各市町村に、弓道場が続々と建設される。その道場開きの度に、連盟からの祝い金が届けられた。また、それらの道場を使っての弓道大会（所謂、お祭り矢場）も、あちこちで開かれるようになった。

昭和53年

国体開催準備態勢を着々と進める。前年までの反省から、準備担当役員を明確にしておいた方がよいということで、それに、熊沢淳吉副会長を充てて準備作業を進める。また、女子部を新発足させて、女子選手の養成をめざす。高段への昇段者を図る為に、3県連合審査会を山梨でも開催するようにして（当面、隔年開催）国体開催へ向けての道を歩み始める。

更に、遠的競技力の向上の為に無くてはならない遠的射場の建設を県に対して強力に要請。因みに、この年の県からの国体選手強化補助金は54,400円也。（50万円のマチガイではない）

昭和54年

役員改選。今回の改選のねらいは、国体準備業務の為の「実務型編成」様々な議論と何人もの候補者の名が出てきた中で、結局次のような構成となった。会長 渡辺良雄、副会長 広瀬邦秋、熊沢淳吉、三枝正徳、小林永正、理事長 中沢利正。国体準備態勢確立のため、再び副会長を増員。また、指導部を拡充強化して、選手養成に強力積極的に取り組むことにする。

8月、こういう状況の中で、国体関東予選会を緑が丘弓道場で開催することになった。急遽、本部役員と支部長に集まってもらい、急造の競技役員を構成し、なんとか運営をやり遂げた。幾つかのゴタゴタとマゴマゴはあったが急造役員にしては、まずまずの出来で、ひとまずホッとした。しかし、本国体の規模と複雑さは、とても関東予選会などの比ではないと想像できる。今回の疲れから考えて、7年後のこと�이やられるというのが、出席者大多数の実感であった。

ところで、この時、ひとつの大問題があった。

山梨には常設の遠的競技場がないのである。やむを得ず、急遽、アーチェリー競技場に仮設遠的射場を作ることになった。それも予算が少ないということで、材料は、宇佐美建設K.K.（身延支部長）から工事用足場機材のパイプを借用し、労力は役員総出の動員人夫

で、大会前日に組み立てるという離れ業。うまい計画のはずだったが、いざ作業にかかると、高さ数メートルのグラグラ揺れる細いパイプによじ登って、パイプを結束する作業など、素人にはとてもできるものではない。結局、その仕事は、宇佐美建設のご子息（パイプを運搬して現場に来ていた）と、建築プロの市川山梨市支部長の二人に任せることになった。弓の腕とナントカは日頃から自信満々の連中も、これには全く手も口も出せず、ただ腕を組んで見ているだけという始末で、お陰で遠的場完成は夕方ギリギリまでかかってしまった。

常設遠的射場建設への必要性を叫ぶ声が、ひときわ高まった。

昭和55年

組織的活動の活発化を図る為、支部構成の改編実施。「市町村支部から、都市支部を原則とする」組織へ移行する。但し、南巨摩だけは、広さと人数という特殊事情から南北2支部に分けることにし、この年から支部は次のようになった。

北巨摩、韮崎、中巨摩、甲府、南巨摩北、南巨摩南、西八代、東八代、東山梨、山梨、塩山、大月、北都留、都留、富士吉田、教職員連盟の16支部に山梨大学、都留文科大学、山梨学院大学の3支部をくわえて、計19支部に再編した。（後に山梨医科大学支部が加わって20支部となった）

また、高校生については学校每一括の団体加盟扱いとした。この時の加盟校29校、後に30校となる。

中学生についても、この年には未加盟だったが、将来、高校生と同様の扱いにすることを含みとして、今後中体連と話し合ってゆくことにした。（その後、平成13年現在で7校が加盟している）

この年の会員数は一般471名、大学生120名、計591名。その内、教士9名、鍊士19名。会費収入519,000円。また、専門部は総務、競技、指導、審査、国体、女子の6部制であった。

久々に全国大会入賞。全国教職員弓道大会で安藤秀保が個人第4位となる。

昭和56年

役員改選。会長 渡辺良雄、副会長 宮田嘉寿、樋口和夫、理事長 中沢利正。
国体準備担当は樋口和夫に代わる。（前任の熊沢副会長が一身上の都合により、固辞した為。引継期間中、業務一時中断）

臨時中央審査を甲府で開催。鍊士6名、6段1名が合格という好成績を得る。
この年は、他審査会場での山梨勢の合格率も良く、称号者が一挙に増加して、年度末には教士10名、鍊士30名という大世帯となる。国体開催に向けての道のりは順調に進む。

更に、関東教職員大会で、山梨チーム（天野 裕、小林武彦、遠藤侃一）は健闘して初優勝。高校弓道の前途に明るい光となる。

昭和57年

会員増加傾向は依然として続き、一般、大学を合わせて600名を超えたが、以前に比べて稍、横這い状態に近くなる。潜在人口（県連には未登録だが市町村体協の弓道部などに所属して練習している）は相当数あるはずなのだが、それが必ずしも県連登録会員数の増加に結びつかない。執行部もそこまでの手が十分に打てなかつた。

選手強化の方も、この年ようやく久々の国体入賞を果たしたが、まだまだ思うように進まず、「毎年上位入賞定着」までには到らない。そこで思い余って、企業チーム構想を立てて、幾つかの企業に呼びかけてみたが、国体選手養成というところまで乗ってくれる企業は見当たらず、結局断念。他の華々しいスポーツとは違って、地味な弓道競技には宣伝価値が少ないということらしい。

つまるところ、やはり、個々の選手を選手自身の熱意と連盟強化部の指導で育成していく他ないと結論付ける。しかし、それにしても、選手達の練習時間等の確保の為には、所属の職場や学校の協力と支援が絶対に必要である。そういう意味での接触を密にしていくことの必要性も痛感する。

国体まで、あと4年。あれもこれも急がねばならないのだが、執行部が焦るわりには、その思いが一般会員には何をしたらいいのかよく分からない状態だった。

昭和58年

国体準備態勢強化の為、執行部大改造。副会長を6人に増員。一般業務と国体準備業務を分離して、国体事務局を設置。

会長 渡辺良雄、副会長 中沢利正、秋山一長、遠藤侃一、小俣繁、畠川皓、深澤寛、理事長 中沢利正（兼任）

国体部長は深澤寛、国体事務局に安藤秀保が就任。開催地増穂町との連絡を密にする為、国体事務局は増穂町役場内に置き、安藤はそこに勤務する（当分の間、隔日勤務）こととした。まさに、非常態勢であった。

また、指導部を発展的に解消して、成年強化部と少年強化部とに分け、副会長がそれぞれ各専門部長を兼ねることにした。

国体準備の難関の一つには財政問題もあった。会員増加が頭打ち状態で、会費収入の伸びが無く、国体対策の資金見通しが全く立たない状況だった。やむを得ず、思い切って会員に協力を要請し、会費増額（およそ2倍）に踏み切った。それでようやく年度会費収入109万円となる。

昭和59年

連盟業務は国体一色となる。

7月には、国体弓道競技会場となる増穂町民体育館が竣工。強化練習をはじめ、連盟の諸射会も殆どこの特設射場で開催されるようになったし、また、諸会議も町役場や体育館を使うことが便利なので、まるで連盟の機能そのものが増穂町に引っ越してきたような感じになってきた。

8月にはここでミニ国体（国体関東地域予選会を前年から、そう呼ぶようになっていた。大会運営を出来るだけ本国体に近い、あるいは同じ形で実施する為と言う趣旨らしい）を開催し、関東各都県の役員選手に国体開催予定会場を紹介すると共に、かいじ国体本番の競技役員予定者で競技運営を行う。会場も同じ、人も同じということで、いよいよ国体が身近になったことを実感。益々意気も盛り上がる。

増穂町役場の国体準備室内に置いた、わが山弓連国体事務局も設置2年目を迎え、役場職員との息もピッタリ。お互いに、それぞれの業務の進行度合いを見せ合ったり、連絡し合ったり、時には、共同作業をしながら、進めているので、その間に齟齬やズレが起きることなし。事務局と一緒にしたのが、思いがけない効果を生んだ。そんな人間関係の親しさが生まれた中で、偶々その年の8月、全国教職員弓道大会OBの部で安藤秀保国体事務局長が優勝。帰ってくると「これは山梨国体の前途幸先良し」と役場の国体室関係者一同大喜びで、翌日祝勝会まで開いてくれる程の歓迎を受けた。かくして、益々仲良くなり、益々仕事が捲るようになった。

一方、選手強化の方は、関係者の懸命の努力により、次第に成果が上がってきたが、国体その他の大会での入賞には、今一歩という段階であった。ミニ国体でも、地元開催であったにも拘わらず各種別とも通過できなかった。そこで、非常手段として、静岡の今村鯉三郎範士を招いて国体専任コーチをお願いして御指導を受けることにした。

昭和60年

国体前の最後の役員改選。副会長7人制とする。会長 渡辺良雄、副会長 中沢利正、秋山一長、畠川皓、小林武彦、深澤寛、秋山照美、安藤秀保、理事長 中沢利正（兼任）

一般業務とは別に、61かいじ国体競技役員136名と全日本勤労者弓道選手権大会（かいじ国体のリハーサル大会として60年6月22～23日に開催）競技役員124名も編成確定。

前年から既に連盟の姿は国体一色に染まっていたが、この年には、リハーサル大会やら、競技役員の研修会、練習会やら、国体関係の行事、事業がいくつも重なっているので、毎年恒例の射会や講習会などのいくつかをカットせざるを得なくなった。まさに、国体の為に動いているという感じの年であった。

6月に、全日本勤労者弓道選手権大会を、国体リハーサル大会として、増穂町民体育館特設射場で開催。全国からの参加は72チーム。うち、山梨からは国鉄山梨、東電山梨、松下電器甲府、宇佐美建設、山梨県庁職員、山梨県高校教職員、NTT山梨、増穂町役場の8チ

ームがエントリーして全国の強豪を迎えうった。結果は、松下電器が1, 2次予選を、増穂町役場、高校職員、国鉄の3チームが1次予選をそれぞれ突破する大健闘で、地元応援席から大きな拍手を受けた。

競技運営の方は細部に若干の弱点はあったものの、概ね順調にこなし、来年への自信を深めた。しかし、一つだけ思わぬ誤算があった。それは、予選通過チーム数が、予想を大幅に上回ったこと。そのために2日目の競技時間が1時間以上も延長し、帰りの交通機関に間に合わせるのに大慌てしてしまった。

従来、予選通過は参加チーム数の5割以下というのが通例で、今回の場合もすくなければ30、多くても35チームにはならないだろうという想定のもとに2日目の2次予選、決勝の時間配分を組んでいたところ、以外にも40チームが規定的中数を超えて通過となつた。全弓連関係者の分析によれば、これは、全国のレベルが急に向上したというよりも、今回は室内競技場の環境が良く、運営もスムーズで、落ち着いた雰囲気の中で行射できたことに拠るのではないかとのことであった。大会が始まって以来の、通過数記録樹立の誉れの一端を、我々も共に担つたことを喜び、長い間の苦労も一挙に消し飛ぶおもいであった。

2 かいじ国体 大会準備と競技運営 昭和51年～53年

第41回国民体育大会が山梨県で開催されることに決定。どんな準備を始めたらいいのか、先催県などに問い合わせながら準備開始。施設だけでも大変な準備が必要とわかる。基準に合致する弓道場は県内どこを探しても無いから、いずれにしても、新しく建設するしかない。それに近的・遠的の練習会場と何百人分の選手控室と、広い駐車場と、何室もの運営役員執務室・作業室等々……

こういう施設をつくるとなると莫大な経費かかるから、どこの市町村が会場になるにしても、これは大変なこと。

競技運営にも、十分に訓練を積んだ競技役員百数十人が必要。そして、それ以上の数の補助員も用意しなければならないという。聞けば聞くほどに、頭が痛くなるような情報ば

かり。さて、どこから手をつけたらいいのか。

兎に角、会議の度毎にそれらの情報を伝えて、役員の意識高揚を図ったが、具体的な進展は遅々として進まなかった。準備担当 熊沢淳吉。

昭和54年～55年

宮崎、栃木の先催県から、資料をもらったが、それがまた膨大な量。一通り読み終わるだけでも一苦労。ようやく1ヶ月ほどかかって、ざっと読み終えた上で、ともかく先催県のスケジュールに倣って、今後8年間の予定表をつくって役員会で検討。

弓道競技は増穂町で開催することが決定。町の国体準備室も発足したので、以後継続的に情報交換し合って作業を進めていくことになる。増穂町の計画では新しい弓道場は作らず、町民体育館の中に近似的特設射場をつくり、遠的には隣接のグラウンドに仮設射場を作る意向であった。

山弓連の方の準備は、担当者段階での準備スケジュール作りに終始して、全員への呼びかけまでには至らなかった。

昭和56年～57年

4年間準備室事務を担当してきた熊沢淳吉が辞任。後任は部長 樋口和夫、副部長 深澤寛となる。

滋賀、島根の国体を視察。資料もたくさん入手してくるが、資料を読むにつけ、競技運営を見るにつけ、地元役員から話を聞くにつけ、その度に改めて、大変な仕事だと実感する。それ等を元手に準備作業を開始する。

とりあえず、競技役員150名くらい必要と云う先催県の例に倣い、各支部から役員候補の推薦を受けて登録開始。先ず、「四段以上の人」という条件で募集したが、この時点では未だ、支部間に意識の差、取り組みの差があって、なかなか順調に進まず、57年度末に至っても100名に達しなかった。

単に頭数を揃えるだけでなく、部署毎に組織化しなければならず、その上で、競技運営の研修、練習が必要だし、このままのスピードでは、間に合わなくなる。準備作業のスピードアップが望まれた。役場の準備室が担当する「大会運営」の業務の方は、着々と進行し、競技会場となる体育館も建設着手。選手の宿舎も一般家庭での民泊方式で行うことになった。競技備品の必要数の調査などを開始しており、それに比べて山弓連側やや立ち後れ気味。いささか焦る。

日体協、全弓連による第1回開催地視察もあった。

昭和58年

国体まで、あと3年半。リハーサル大会まで、あと2年。その前にミニ国体（関東予選）開催も予定されている。待ったなし。急がねばならない。

この年の役員改選の中で、国体部役員も更新。部長 深澤 寛、副部長兼事務局長 安藤秀保となる。

執務形態も非常体制をとる。役場国体準備室に山弓連コーナーを設けてもらい、事務局はそこに隔日勤務（その後、毎日となる）して、執務することにした。幸いその年の3月に安藤秀保が定年退職して、時間的余裕のある身となっていたから、それも可能だったのだが、先催県の例で見ると、その年に既に奈良県（59年国体）は2人専従制、鳥取（60年国体）では会社ぐるみの専従制をとって、開催準備の仕事を進めていて、その点、山梨県はかなりの立ち後れがあった。

先催県の準備スケジュールをみると、国体の3年前には、競技役員の編成を終えて、研修会を開いている。それに、早く追いつく必要がある。特に山梨の場合、59年にミニ国体の当番にもなっているから、よその県よりも、一層急がねばならない事情もある。そこで、何よりも先に競技役員の確定が必要であった。

昨年度までの役員名簿を再検討してみると、状況が不明確なまま応募したため、既登録者の中にも実際には出席できない人（日数が多くすぎる。時期的に無理、年齢や健康状態などの理由）が相当数含まれていることが判明。やむを得ず今までのものは、ご破算にして再募集に踏み切る。募集の方法を変えて、今回は、各係を支部毎に改め（それは、ある程度、組織化された集団であることを企図した）段位には、あまりこだわらず、実務処理、行動力、指揮能力等を重点に人員配置を考えて、編成した。その結果、年度末までには、何とか130人の人数を確保して編成を終わり、原則としてこの陣容で、59年ミニ国体、60年リハーサル大会、61年本国体までを続けて運営に当たる方針を取った。

また、競技備品（的、巻藁、弓立て、矢立て等）の数や施設設備（梁、射場、掲示板、控室、通路、練習会場等）の様式について一つずつ役場準備室との間で打ち合わせを行い、準備を整えた。

この年に行われた奈良リハーサル大会視察4名。群馬国体視察6名。山弓連執行部と国体の主要競技役員に呼びかけたが、この時点ではまだ、視察希望者が少なかった。

「見学しなくても、分かっているから」というような雰囲気が濃厚だった。県連の射会と国体競技運営では、雲泥の差があることも、まだ、十分に認識されていなかった。また、「国体はまだ、3年先」という心の緩みもあったかも知れない。少し緊張感を高める必要があった。

そこで、年度中途から、「国体部だより」の発行を始める。全会員に国体への関心を深めてもらう事を企図した。3月までに、1~5号を発行。印刷は増穂町役場のオフセット輪転機を利用させてもらう。全会員600枚の印刷は5分程で刷り上がった。便利な事務機でずいぶん助かった。

昭和59年

8月のミニ国体に備えて前年度末から事務局には安藤秀保事務局長は毎日出勤態勢で準備作業に当たる。

年度前半の取り組み目標は「ミニ国体の運営」を通して競技役員の運営能力を高めること。その為には先ず、あかぎ国体資料と、その視察経験を参考にして、「競技役員必携」を作成。それを使っての競技役員講習会を2回開いて、競技運営要領の徹底を図った。この段階ではまだ、役員個々がそれぞれ独自の経験からくる独自の意識を持っていて、一つの動作を行うにも別々の違うやり方があったりして、それを統一するのに、かなり手間取ることがあった。

中には所謂「お祭り矢場」方式そのままであったり、「そんな面倒なことをする必要はない」などと文句を言うベテラン勢を矯正したり、説得したりして、統一するのは結構骨が折れる仕事だった。

7月に増穂町民体育館竣工。その後、突貫工事で近的特設射場と遠的射場とを完成させてミニ国体を迎える。

8月、ミニ国体。新装なった競技場で開催。2回だけの役員講習であったにしては、まずまずの出来だったが、反省点もいくつかあった。特に前動作でのもたつき。進行と記録本部との連携、放送のタイミング等に若干の練習不足が見られ、今後の課題と思われた。

課題克服の為に、この後、競技役員研修会に群馬弓道連盟（前年度国体開催地）加藤会長を招いて、役員の心得と題する講演を聞く機会をつくった。

また国体開催期間中を含む今後3年間の財政見通しを作るため、赤城国体当時の群馬弓連会計担当者を群馬県新治村に訪ねて、諸資料を頂くと共に貴重な諸体験をも聞いて参考にした。

県外先催大会視察は、6月の米子リハーサル大会と、10月の奈良国体。米子では主として総務関係の業務、特に専従者の勤務方法と競技場（新設）を含む諸施設の運用状況などを丹念に視察した。鳥取県連は山梨と同様に会員数の少ない組織で、そういう条件の悪さをどのように克服してきているか大変興味があった。特に、国体準備業務を特定の企業の中に一室を設けておこなっている（その企業の中に弓連役員がおり、その他にも有力会員が何人か居る）というのが異色であった。他県では、大抵県立高校教員などを、授業数軽減措置によって専従勤務させるというのが普通であるらしいのだが、それに比べて、この企業全面協力という方式にはびっくり。

奈良視察では、競技役員24名、連盟執行部6名が参加。競技役員の中には、他にも多くの参加希望者があったが、8月のミニ国体の経験から、「やはり、一度見ておきたい」人が多くなつたらしい。経費の都合もあり、各部署主任以上の役職者に限定した。視察に際しては、予め奈良弓連に了解を求め、こちらの参加者一人ひとりの役職に相応する役職の人を決めて置いてもらい、大会中の行動を共にして、当該部署の視察と質問をその場で戴けるようにしておいた。その為、奈良弓連には大変なご迷惑をお掛けしたが、お陰で十分に密度の濃い学習をすることができた。運営技術の向上におおいに役立った。

奈良国体視察の結果、従来の「競技役員必携」の内容の見直しをする。一層具体的なマニュアルにしなければ、ということで、改訂版作成。

昭和60年

国体部の陣容充実。部長 安藤秀保（事務局長兼任） 副部長 小松礼次郎、部員 広瀬邦秋、村上一郎。業務を4人で分担できる態勢ができた。

6月にリハーサル大会（全日本勤労者弓道選手権大会）を開催。競技委員長座光寺貞良、副委員長 千野保平、運行委員長 丸山宇太郎、県内審判は小俣 繁、佐野 忍、秋山一長がある。競技運営は、近的係、遠的係が交互に担当して、全会期を通して役員全員がひと通り経験することが出来、大いに有意義であった。その結果、数多くの弱点や欠点も発見されたが、それを克服して翌年の本国体を成功させる大きな自信も生まれた。

おおいに気をよくして、さて次は翌年の本番に向けての準備開始となったところで、思いがけない躊躇があった。7月に広瀬、8月に村上、そして11月には小松と国体部3人が相次いで病に倒れて勤務不能、残るは部長の安藤が一人。折角盛り上がった国体準備の雰囲気が一挙にしほんだ。後任補充もままならず、やむなく3月までは安藤部長がひとりで務めざるを得なくなってしまった。

競技運行要領第2次改訂。今回は各部署の一つひとつの動作、言葉に至るまで、具体的に示すこととし、それを携行して、各部署主任の自宅を訪問し、説明して回った。

このやり方は予期以上の効果があった。全体研修会では、いくら丁寧に説明しても、また長時間かけて質疑応答を繰り返しても、やはり細部については、十分な理解、納得には至らないことが多くなりがちだが、これは、担当業務についての一対一のやりとりだから、トコトン理解しあえるようになった。そして、その後、その要領に基づいて、部署毎に説明や実習を積み重ねていくことによって、きめ細かで、スムーズな運行ができるようになっていった。

県内十数カ所に点在する役員宅を訪問するのは、(中には2回、3回と訪問を重ねるところもあった)大変だったが、しかし結果的には予期以上の成果があがった。

この年、全会員から国体募金を募る。何としても国体を成功させたいとの一念からの要請が受け入れられて、400万円余りの大金を集めることができた。

以後、競技役員講習など、県補助金の枠を超えて緻密な練習を重ねることが出来、大会を成功に導く大きな力となった。

10月には島根国体を視察して、かいじ国体計画の点検。年度後半には、国体競技場に、県強化選手だけでなく、県外選手達が練習に来る回数も多くなり、それ等への対応にも気を配った。

昭和61年

いよいよ本番の年。前年度後半から欠員となっていた国体部員を補充。農林高校 中島勝人教諭が派遣されて（授業時間減免措置により、週3日弓連勤務という条件）再び順調に準備作業開始。一時はどうなることかと心配したが、強力な助っ人を得て不安解消。ともかくここまで来ているのだから、少数精銳で頑張っていこうと決意を新たにして、準備作業に明け暮れる毎日となる。

競技役員講習会6回。部署毎の打ち合わせや練習会もそれぞれ5~6回ずつ実施して万全

を期した。しかし、その間に、競技役員の一部入れ替えと補充をしなければならない事態も生じた。前述のように、講習会が年間10日余り、それに大会期間中は、前日から5日間連續勤務という、ハードスケジュールであり、既に過去2年間にも通算10日以上の勤務日数があった。

「勤務先の承認が得られず、休暇が取れない」あるいは、「自営の商売が成り立たない」とか、「健康を損ねた」等の理由から、役員辞退のケースが何件か出てきたからである。時あたかも世間は不況の真っ直中。会社の上司の目を気にしながら、あるいは一日の稼ぎを棒に振って無償奉仕をしていただいたこれ等の人々に満腔の敬意と感謝を捧げたい。そういう中で迎えた「第41回国民体育大会 かいじ国体」である。昭和61年10月13日開会。

今回は、競技委員長 宮田嘉寿、副委員長 秋山一長、運行委員長 丸山宇太郎、県内審判員 遠藤侃一、佐野 忍、田中守正、浅川 広、総務委員長 中沢利正、副委員長 安藤秀保、その外連盟の総力結集という形で大会運営に臨んだ。

当日の運営、進行は大成功。閉会式での全弓連 斎藤会長の挨拶では「まことに心のこもった運営ぶりで大会始まって以来の出来。ふれあいの輪を広げようというスローガンが、至る所に生きていって、国体一巡目最後を飾るに相応しい大会であった」と絶賛され、一同思わず万歳を叫んで渡辺良雄会長の胴上げに走った。

この成功感を得るために何年間もの準備期間から大会期間に至るまで、大変な苦労の連続であったが、しかし又、得たものも大きかった。

大会終了後にまとめた「成果と課題」（国体だより最終号所載）の要点を挙げれば次の通りである。

- 1 国体運営は単に日体協、全日弓連の事業の請負をするということだけでなく、それを通じて主管県連の力が試されるということでもある。今回は存分にその力を発揮して、各関係者に示すことができ、山梨県弓道連盟の名誉を高め得た。
- 2 国民体育大会という、国内最大の大会が運営できるということで、今後、どんな大会、競技会が来ても大丈夫という大きな自信が生まれた。
- 3 今回の成功を導き出した要素には数々あるが、その中の特筆すべき力として各地域グループの、人の繋がりと結束力を挙げたい。今後の連盟運営にも、大いに参考になった。
- 4 大会成功的原動力の一つは、各係長や主任等の力量であり、リーダーシップである。部署の雰囲気を楽しくするのも、部署員にやる気を起こさせるのも、また、業務や練習を効率的にするのも、(そして又、その反対も)リーダーの力量如何に掛かっていることが多いということである。今回の成功を勝ち得た功績の大きなもとが、各リーダー達の力量にあったと言える。
- 5 最初は、全くの異質集団であった競技役員と高校生補助員との関係が、最後の大会終了時点では、共に喜び、共に泣くような、同士的結束にまで密着した間柄になっていた。同じ目的に向かって共に苦労していく中で親しみや信頼関係が増し、そして、そこから更に良い仕事が生まれてくるということを、この数年間で体験的に理解した。
- 6 開催県になってみて初めて、地元の苦労というものが分かった。どこでも皆、このような苦労を重ねて準備態勢を整えてきたのだろうと思い、他県で開催される国体に参加する

ときは、現地に迷惑をかけないように気をつけなければと、つくづく思った。(そう思う裏には、他県選手やチームの目に余る残念な行動をいくつか目にしたからである。)

- 7 各県の選手やコーチから、札状が数多く寄せられた。また、民泊家庭との交流も盛んに行われているらしい。人の心と心を結びつけた、まさに「ふれあいのかいじ国体」であった。だが、振り返ってみると我々自身は、これまでお世話になってきた開催県関係者に、これほど丁寧な謝意を表していただろうか。「礼に始まり、礼に終わる」弓道人としての心掛けをひとつ教わった気がした。
- 8 組織の中にも、一人ひとりの心や体の中にも数多くの収穫を得たが、国体が終わった後、形になって残る「モノ」が無かったのが残念。やはり他県にできたような、立派な国体記念弓道場が残って欲しかった。近々インターハイ開催の順番も回ってくるという。その時を期して「今度こそ」の決意を新たにした。

かいじ国体競技日程表（走り続けた5日間）

10月12日 審判会議

10月13日 開会式・矢渡

近 的	遠 的
少年男子予選1・2回戦	成年男子予選1・2回戦
少年女子予選1・2回戦	成年男子 決勝
成年女子予選1回戦	成年男子 表彰式
少年男女トーナメント抽選	

10月14日

近 的	遠 的
成年男子予選1・2回戦	少年男子予選1・2回戦
成年女子予選2回戦	少年男子予選 決勝
成年男女トーナメント抽選	少年女子予選1・2回戦
	少年女子 決勝
	少年男女 表彰式

10月15日

近 的	遠 的
成年男子トーナメント1回戦	成年女子予選1・2回戦
少年男子決勝, 少年女子決勝	成年女子 決勝
少年男子 少年女子 表彰式	成年女子 表彰式

10月16日

近 的	遠 的
特別演武 成年女子 決勝、成年男子 決勝 納射 表彰・閉会式	